



◎1888年創立の尋常中学校と宮崎町大淀村高等女学校を母体として1948年に発足。「自主自律」を校是としたリベラルな校風を特徴とする。部活動は、カヌー部や歌留多部などが全国大会で上位入賞を果たしている。

設立

1888(明治21)年

形態

全日制／普通科・文科情報科／共学

生徒数

1学年約440人

12年度入試合格実績(現浪計)

国公立大は、東北大、東京大、名古屋大、京都大、大阪大、広島大、九州大、熊本大、宮崎大、北九州市立大、宮崎公立大などに273人が合格。私立大は、上智大、明治大、早稲田大、南山大、同志社大、立命館大、関西学院大、西南学院大、福岡大などに延べ237人が合格。

住所

〒880-0056  
宮崎県宮崎市神宮東1-3-10

電話

0985-22-5191

Web Site

<http://www.miyazaki-c.ed.jp/miyazakiohmiya-h/>

宮崎県立  
宮崎大宮高校

学びの質の向上

# 量から質の指導に転換 生徒の主体性を育て 行くべき大学を目指す

変革のステップ

背景

◎宮崎県の公立高校入試が全県一区となり成績上位層が増えたが、大学合格実績が思うように伸びなかった

STEP 1

実践

◎生徒の主体性を育む「学びの質の向上」のための授業のあり方を職員研修で協議、実践

STEP 2

成果

◎「量より質が大切」という教師の意識改革が進む。生徒の主体性が伸び、大学進学実績も向上

STEP 3

生徒の学力の伸び悩みから  
脱物量主義に舵を切る

宮崎県立宮崎大宮高校は、2010年度から「量から質への転換」を重点目標として、職員研修や課題の縮減などに取り組んできた。

宮崎県では08年度入試から学区制が撤廃されて全県一区となり、県内でも有数の進学校である同校には、以前にも増して成績上位層の生徒が入学するようになった。大学進学実績の向上が期待されたが、入学時の学力の割には実績は伸びず、3年生後半から模試の成績が急落するという例年の傾向にも変化は現れなかった。

「生徒は遅くまで残って頑張っている」「手を抜いているわけではないのに、なぜ成績が上がらないのか」。教師たちが自問した末にたどり着いたのは、量中心の学習指導の限界だった。進路指導主事の山崎慎一先生は次のように語る。

「宮崎県では、伝統的に圧倒的な量を課して生徒の学力を伸ばしてきました。朝課外や日々課題はもちろん、徹底的に量を与えることが、教科担任の力量であるという雰囲気さえありました。学区制廃止後も出来る限りの指導をしてきましたが、それは量に頼った指導の延長でした」

折しも、同校は08年度に創立120周年を迎え、1周を60年と考えると3周年となる。122年目の10年度に「サードステージ・プロ

「ジェクト」として学校改革を始め、その議論の過程で改革の軸に浮上したのが「量から質への転換」だった。教務主任の鬼束雅史先生は言う。

「生徒にとって教師から与えられた課題だけが勉強になってしまい、主体的に学ぶ習慣も能力も育っていないことが、学力の伸び悩みの原因ではないかと考えました。受動的な学習態度が固定化し、本来は『行くべき大学』を目指すべきところを、多くの生徒が『行ける大学』に進む結果になっていたのです。プロジェクトの内容について議論する中で、生徒のより高い志望を実現させるためには、生徒の主体的な学習態度を育成する必要があります。そのためには学びの質を見直していくべきだ」という結論に達しました」



宮崎県立宮崎大宮高校  
**鬼束雅史** おにつか・まさひみ

教職歴26年。同校に赴任して12年目。教務主任。「集団の中での役割を自覚し、率先して行動できる人間に成長してほしい」



宮崎県立宮崎大宮高校  
**山崎慎一** やまさき・しんいち

教職歴28年。同校に赴任して7年目。進路指導主事。「生徒の持つ能力やその可能性を見逃さず、見付け出すことを心掛けた」



宮崎県立宮崎大宮高校  
**山崎俊一** やまさき・しゅんいち

教職歴16年。同校に赴任して7年目。研修部主任。文科情報科主任。「学ぶ楽しさを生徒たちと共有したい」

## 「数で勝負する時代は終わった」 教師の意識改革を断行

10年度にプロジェクトの内容が固まり、11年度に職員研修を担う研修部を設け、「量から質への転換」に向けた本格的な改革が始まる。

明確な方針が打ち出されたが、教師自身が高校時代に量をこなす指導を受けてきたこともあり、指導の方向性の転換は容易ではなかった。

「国公立大合格者を重視した指導をと考えると、どんなに忙しくても家庭学習や課題などの量の確保を優先させてしまいます。そうした意識の強い先生方にとって、本校の方向転換は指導観を根底から覆すものです。量から質への転換の鍵は、先生方の意識を変えていくことにありました」（山崎慎一先生）

口火を切ったのは黒木正彦前校長だった。「これからは『行くべき大学』に挑戦させたい。国公立大合格者数が減るのは本質的な問題ではない」と説き、「数で勝負する時代は終わった」と明言。段正一郎教頭も「自分を変える勇氣を出そう」「自己変革の覚悟を持つてほしい」と繰り返し訴えた。このような思い切った改革は、校長が代われば元に戻るのではないかと不安を抱く教師もいたが、12年度に赴任した有枝定幸校長によって、改革は更に推進された。

研修部では、11年度に職員研修を4回実施し、質を高める授業のあり方について段階的に意識

改革を進めた。研修は次のような流れで行った。4月に行った1回目は、年度テーマである「質重視の授業のあり方」を提示し、3年生後半からの学力の伸び悩みは、生徒が与えられる指導に慣れてしまい、応用力が育っていないことに原因があるという仮説を示した。その上で質を高める授業の例として文科情報科の「探究」の指導法を紹介し、改善の方向性を提示した。「探究」は生徒自身がテーマを選び、学習計画を立てて実践する課題解決学習である。研修部主任の山崎俊一先生は次のように述べる。

「ベネッセの進学資料によれば、学習の質を高めるには、与えられた課題をこなすだけの習得型学習から、テストの失敗などから学ぶ定着型学習、更に予習を中心に自ら仮説検証を行う探究型学習へ発展させる必要があります。日々課題のような習得型の学習ばかりでは、学習内容の本質や考える力、難関大に対応する応用力は身に付きません。探究型の学習姿勢を身に付けられるかどうかが難関大に対応できるか否かの分岐点であり、『探究』の指導法がそのヒントになると考えました」

## 教師の不安を受け止めながら 対話型の研修で徐々に意識を変革

7月の2回目には、1回目で示した課題を踏まえ、国語、世界史、数学、物理、英語で研究

授業を行った。各教科で「質の高い授業」とは何かを考え、教科の代表1人が学習指導案を作成して研究授業を実施。その後、質と量のバランスについてグループ協議を行った。

10月の3回目では、6人1組のグループ協議や管理職と各主任によるシンポジウムで、これまでの成果と課題を検討し、校是である「自主自律」との関連を議論した。2月の最終回では、教師に意識調査を行い、個人・組織レベルで1年間を振り返り、グループで次年度に向けた展望を話し合った。

こうした議論の末、教科を問わず、これからの授業に求められる要素として、次の3点が提示された。①限られた授業時間を最大限に活用し課外や課題に頼らない、②教科の本質を学ばせるために学習内容を精選する、③知的好奇心を刺激して内発的動機付けを高める、である。

一連の研修により、教師の授業に対する意識は徐々に変わっていった。「量が増えれば生徒の理解度が深まり、学びの質も高まると思っていたが、そうではないと考えるようになった」「授業では答えを導き出す姿勢を大切にしたい」といった意見が寄せられた。教師同士が意見を出し合いながら徐々に意識を共有していく「対話型」の研修をしてきた結果だろう。

「生徒と向き合い、授業をするのは私たちです。一方的に方針を示すだけで完結するものではありません。先生方の意見を聞き、不

### 国語科指導案

国語科学習指導案	
単元名	評論 小浜逸郎『人はなぜ働くか』
目標	自己と社会との関わりについて深く考え、自分自身の考えを持とうとする態度を育てる。 二項対立の論理構造を的確にとらえる。
指導要	本教材は「人はなぜ働くか」という問いに対して、二つの仮説に反論を行った後、自分の主張を展開する二項対立（「○○はAではなくBである」）を基盤とした文章である。生徒たちは、前田賢田清一の「要義としての身体」を読んだが、二項対立の論理構造をなかなか読み取れない生徒がいる。そこで、本授業では本文を読む前に「人が働くことの意味」について話し合いをさせ、まず筆者の論理展開を疑似体験させることから始める。そして、自分たちの考えとの差異を意識させながら本文を讀ませ（認識の相対化）、最後に本文の要約をまとめさせる。その際、単に本文の種小名（相似形）としての要約ではなく、論理の骨子である①「筆者の問語意識」、②それに対する「筆者なりの見解（主張）」、③その「主張を支える根拠」の3要素を意識させた要約をまとめさせたい。
学習材	・小浜逸郎『人はなぜ働くか』 ・ホワイトボード、ミニホワイトボード、マジック
学習指導過程	
学習内容及び活動	教師の支援
①「人がなぜ働くか」について、自分なりの考えをまとめ、発表する。	・ブレンストーミングの要領で自由な発言を促す。 ・筆者の想定した仮説①「人生を充実させるために働く」、仮説②「労働は美德である」に関連するものがあれば、取り上げる。
②「人が働くことの意味」について、グループごとに分けて、検討させる。 1 仮説①「人生を充実させるために働く」の反論（2班） 2 仮説②「労働は美德である」の反論（2班） 3 仮説①②以外の見解（2班）	・仮説①②以外の見解については、できるだけ多くの意見が出るように促す。 ・ミニホワイトボードを利用して、グループでの意見をわかりやすく簡潔にまとめようとするように指示する。
③テキストを読み、筆者の主張や論理展開を押さえた後、要約をまとめさせる。	・生徒の考えた意見の相違点を意識させながら、論理展開を押さえる。要約は下記の枠組みをします。 「人が働くことの意味は○○ではなく○○である。なぜなら○○だからである」
④筆者の論理展開と生徒が「探究」(学科独自の授業)でまとめた研究論文の書式とを比較させる。	・筆者の論理展開は、生徒たちが「探究」の時間でまとめた研究論文と同じで、裏根を追究する上で普遍的なプロセスであることを確認する。

2回目の研修で実施された研究授業の指導案。文科情報科の「探究」の授業をベースに、「問い→仮説→検証→表現」というプロセスを取り入れて、「人はなぜ働くか」という哲学的な問いについて考察する。  
\*学校資料をそのまま掲載

安や疑問を受け止めながら、少しずつ目線を揃えることが大切だと感じました」（山崎俊一先生）

12年度は、他校の視察も積極的に実施。多くの教師が、課題や課外を伝統的に課さない高校を訪問できるように調整した。そして、2学期に有枝校長から「予習を前提とした授業への転換」や「日々課題や課外の削減」が提案された。

### 物語性のある単元構成で 生徒の主体的に学ぶ姿勢を育む

これらの取り組みにより、探究的な学習活動

を取り入れた、物語性のある単元構成が組み立てられるようになったと、山崎俊一先生は指導の変化を説明する。

「一方的に学習内容を伝達するのではなく、生徒からの疑問や意見を出来るだけ授業に取り入れ、そこから授業を組み立てることを心掛けるようになりました。生徒との対話を通して、学習内容の本質に迫り、思考力や表現力を育成するような授業です。この学習の流れの中で、身に付けるべき力を計画的に付けていくようにしました」（図）

模試の対策なども、これまでは単発的に行われていた。しかし、これらは一見、効率的・合

理的に学習できるように見えて、すぐに忘れてしまう。授業での学びの流れを途切れさせないためにも、模試対策は原則行わないことにした。模試の成績の下落は覚悟の上だったが、実際には、成績は例年とほとんど変わらなかった。

「質重視の方針とうまくかみ合った結果であり、教師にとって大きな自信となりました。授業の質を高めることにいっそう注力できると感じました」（山崎慎一先生）

課題の出し方も変わった。これまでは毎日課題を出して回収する「日々課題」が基本だったが、長期的スパンで課題を提示したり、授業の予習を課題にしたりして、生徒が部活動や他教科の学習とのバランスを考えながら計画的に取り組めるようにした。

「日々課題は習得型の学習が中心のため、こればかり続けていると考え方が硬直してしまい、多角的な思考を要する複雑な問題に挑戦する骨太の学力も粘り強さも育ちません。生徒が自分で学習状況を分析し、必要な活動について考える『自己教育力』を育成するために、主体的な学習に取り組ませることが大切だと考えています」（山崎俊一先生）

## 「大宮学びの時間」は 将来に向けた自分への投資

課外活動などの改革にも取り組む。まず、3

年生の放課後に授業の補完として実施していた放課後課外を選択講座制にした。国語は現代文と古典、化学は有機と無機というように分野別に講座を設け、更に難関大、センター試験などのレベル別の講座として、生徒が自身の目的に合わせて選択するようにした。

「生徒が自分の足りないところを見極める力を付けると共に、自ら選択することで主体的に学びに参画する意欲を醸成するのが狙いです」（山崎慎一先生）

月曜の7限目には「大宮学びの時間」を設け、生徒自ら学習内容を決めて取り組む「将来への投資の時間」と位置付けた。

「優秀な生徒に一律に課題を与えると、与えた分しか伸びない危険性があります。教師の指導に頼らなくても自分で考えて学習できる生徒が増えていることを私たちも自覚し、生徒の力を信じて、主体性を引き出していきたいと考えています」（鬼束先生）

授業で分からなかったところを先生に質問する、たまっている課題を終わらせる、探究的な調べ学習を行うなど、生徒が必要と考える学習に自らの判断で取り組ませる。時には、進路指導部が、2、3年生を対象に難関大講座を開くこともあるが、その間、教師は基本的に一切管理はせず、巡回指導も行わない。生徒へのアンケートでは、85%以上が「有効に活用できた」と回答しており、生徒の満足度は高い。

改革から2年が経過し、「量から質への転換」は徐々に教師に浸透していった。「探究」を導入した文科情報科では、課題であった3年生時の学力の下げ幅を抑えられるようになり、大学進学実績においても、東京大、京都大、難関大への合格者数も増えた。今後は、「探究」の授業理念を普通科にも広げ、予習を前提とした授業の推進、課題や課外の精選、校内模試の復活などを含めて、全体設計を進めていく考えだ。こうした学校の状況を、中学生や地域に発信していくことも課題である。近年、一部で、同校の改革について「宮崎大宮高校は放任になった」などと言われていることもあるからだ。中学生や保護者、地域の人々の誤解を招かないよう、中学校や塾へ同校の改革の意図を正しく伝え、自分自身の未来を切り拓く気概を持った生徒に志望してほしいと期待する。

「生徒の多くは、本校に来れば大学進学は何とかしてもらえという期待を持って入学します。しかし、未来を切り拓くのは自分です。本校がずっと大切にしてきた自主自律の精神の下、『行ける大学』ではなく『行くべき大学』に挑戦する気概や自ら学ぶ姿勢を育てていくのが、本校の目標です。教師自身も更に指導力を高め、正確な情報提供を心掛ければなりません。これからも、生徒が本校に来てよかったと思えるような指導を追求していきたいと思えます」（鬼束先生）

今回のテーマに関連する過去の記事はBenesse教育研究開発センターのウェブサイトでご覧いただけます。

2012年10月号指導変革の軌跡「岩手県立盛岡第三高校」など

▶▶▶ <http://benesse.jp/berd/> → HOME > 情報誌ライブラリ(高校向け)